

筑前方言のアクセントについて

稲川, 順一
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/12137>

出版情報 : 語文研究. 38, pp.38-47, 1975-01-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

筑前方言のアクセントについて

稲川 順一

筑前式アクセントは、平山輝男氏の「九州方言音調の研究」に詳しい。しかし、その解釈において、金田一春彦氏と奥村三雄氏との間にくい違いがある。これは、豊前式アクセントと、筑前式アクセント、老岐・対馬式アクセントとの系統に關係することである。もう一つの問題として、若い世代における共通語の影響がある。本稿では、右の問題に、今回の調査で得られた事実を示し、若干の考察を加えたい。

二 従来の研究

日本方言音調について、初めて全国に亙る臨地調査を行ないその実態を明らかにされたのは、平山輝男氏である。その業績の集大成とも言えるものが、一つは、昭和二十六年に出た「九州方言音調の研究」(學界之指針社刊)であり、一つは、昭和三十二年に出た「日本語音調の研究」(明治書院刊)である。(この二著の前身に「全日本アクセントの諸層」昭和十五年、

育英書院刊、がある)。筑前方言に関しては、前者の第四章「九州東北部の音調」の中に記載がある。この箇所の記事のもとになった氏の論文に、「九州東北部のアクセント境界線」(「方言」7巻9号・昭和十二年)、それに、「九州東北部のアクセントとその系統(上)(下)」(「國學院雜誌」・昭和十六年一・二月)がある。また、最近の論文として、岡野信子氏の「福岡県宗像郡大島村のアクセント生活」(「方言研究年報」第十六巻・一九七三)がある。

金田一春彦氏の論文「対馬附老岐のアクセントの地位」(「対馬の自然と文化」昭和二十九年・古今書院刊)、それに、奥村三雄氏の論文「対馬方言の性格」(「九州文化史研究所紀要」第十八号・昭和四十八年)には、筑前アクセントについて、他の方言との系統關係を論じてある。

三 筑前方言音調の位置

福岡県で行なわれている主なアクセントは、東京式音調(豊前式)、東京系に近い特殊音調(筑前式)、一型音調(筑後式)

の三つである。それぞれ北西から南東へ帯状に走っている。この分布状況は、九州方言音調全体にもあてはまることである。東京系、一型、二型それぞれのアクセントが北から順に、北西から南東へと分布している。福岡県の三つのアクセント型は、豊前式が最も古く、次に筑前式で筑後式が最も新しい。さて、筑前式音調が行なわれている地区は次の通りである（『九州方言音調の研究』による。）

- 遠賀郡（岡垣）、飯塚市、福岡市、宗像郡（東郷・池野）
- 鞍手郡（植木・宮田・小竹・福丸・笠松）、嘉穂郡（穂波・上穂波・桂川・大分・大隅）、粕屋郡（小野・仲原）、早良郡（金武）、糸島郡（前原・北崎・野北・長糸・雷山・周船寺・深江・福吉）、筑紫郡（二日市・石崎・御笠・春日）

四 調査の方法

この度の調査は、主に二音節名詞二五〇語について行なった。調査域は、福岡市が中心で、また福岡市東部の粕屋郡、宗像郡、それに豊前にも足を伸ばした。最初、二音節名詞二五〇語の調査は、はやく済ませて、語彙をふやし、多音節名詞の調査も広く行なうつもりであった（筑前では、動詞、形容詞の音調は一型アクセント）。しかし、二音節名詞を調べていくうちに、面白い現象が見られたので、この二五〇語についての調査を中心に行なった。筑前アクセントの領域では二十三人、豊前アクセントの領域では五人について調査を行なった。特に気をつけた点は、いわゆる第一類、第二類、第三類名詞の関連についてで

ある。また、調査を進めていくうちに、共通語音調の影響も観察できた。筑前方言音調の持主四人（左表に○）については、語彙を一九七語増やし、四四七語について更に詳しく調査を行なった。

筑前の被調査者二十三人は次の様である（年齢順）			
嵯峨トク氏	明治二十八年生	西区より東区へ（居住歴）	
○野上徳兵衛氏	二十九年	西区	
○大社文治氏	二十九年	宗像郡津屋崎町	
○石橋源一郎氏	三十二年	博多区	
釈迦野イネ氏	三十三年	西区	
藤村和夫氏	三十五年	西区	
平井百代氏	四十三年	中央区より博多区へ	
武藤万重氏	四十三年	西区（一時期岐阜、ただし、言語形成期ではない）	
大野元喜氏	四十五年	西区	
青木重種氏	大正一年	粕屋郡粕屋町	
只松清氏	六年	〃 久山町（言語形成期外に若松市に在住）	
丸山ハセノ氏	七年	西区	
徳長福二氏	九年	南区	
力丸恭氏	十二年	宗像郡宗像町	
○中山瑞枝氏	昭和二年	博多区より東区へ	
稲倉敬子氏	三年	四歳迄北海道・後中央区	
平山英子氏	八年	西区	

城戸新吾氏	昭和八年生	西区
安達健氏	十一年	西区
舟越京子氏	十二年	東区
吉田正孝氏	二十五年	柏屋郡柏屋町
八尋千佳子氏	二十五年	博多区から中央区
大野倫子氏	二十六年	西区

右にあげた人のうち数人は、一時期、同じアクセント型ではない地区にいた事がある。これは、そのことが、その人のアクセントにどういふ影響を与えているか、言語形成期に習得したアクセントが、どの程度の根強さを持っているか、を調べるためである。

次に調査語彙をあげる。この語彙は平山輝男氏の「九州方言音調の研究」との比較を容易にするため、同書からとつた。

ア行	青	赤	秋	麻	朝	痣	足	味	汗	跡	穴	兄
姉	網	給	雨	蟻	粟	家	烏	賊	息	池	石	椅子
板	糸	犬	稻	芋	色	岩	魚	牛	白	嘘	歌	腕
馬	膿	梅	裏	瓜	枝	海	老	襟	岡	沖	桶	音
帯	親											
カ行	貝	顔	垣	牡	蠣	柿	鍵	崖	影	駕	瘡	笠
風	肩	蟹	金	壁	髪	紙	亀	蚊	帳	茅	殻	川
菊	雉	子	傷	北	絹	牙	肝	錐	霧	草	櫛	口
国	熊	雲	蜘蛛	鞍	倉	栗	桑	下	駄	鯉	腰	琴
粉	瘤	独	楽	米								

サ行	坂	酒	錆	鞘	皿	猿	塩	鹿	式	品	支	那	柴
島	尻	汁	城	白	皺	鋤	杉	寿	司	鈴	裾	砂	炭
席	咳	蟬	袖	外	側	蕎	麦	空					
夕	行	鷹	滝	竹	蛸	棚	種	旅	足	袋	玉	樽	月
土	角	爪	粒	露	鶴	弦	鉄	寺	毒	年	虎	鳥	
泥													
ナ行	梨	茄子	夏	鍋	生	波	繩	肉	西	虹	庭	糠	
葱	猫	喉	蚤	鑿	糊	海	苔						
ハ行	墓	箱	箸	橋	恥	旗	蜂	鼻	花	羽	幅	浜	
腹	針	春	髭	肱	人	暇	紐	昼	蛭	笛	服	藤	
富	士	蓋	縁	筆	鮒	船	冬	星	骨	堀			
マ行	前	孫	町	松	窓	真	似	豆	菰	水	店	味噌	
溝	道	耳	麦	婿	虫	鞭	胸	村	飯	桃	股		
ヤ行	山	闇	雪	指	弓	夢	夜						

また、特に四人については、次の語彙を追加して調べた。なお、この語彙は、金田一春彦氏著「国語アクセントの史的研究」(昭和四十九年・塙書房刊)からとつたものである。

藍	垢	灰	汁	鱒	明日	蛇	尼	綾	鮎	粟	菰	市
井	戸	蛆	上	うち	畝	甥	甲	斐	擢	槽	型	方
門	角	仮	名	鐘	株	釜	鎌	神	上	瓶	鴨	彼
北	杵	黍	君	桐	際	杭	茎	釘	串	屑	糞	管
首	組	暮	黒	鋤	今	朝	桁	今	日	恋	声	苔
籠	事	駒	胡	麻	薦	此	頃	竿	先	鷺	蛙	笹
鯖	鮫	潮	標	下	霜	末	筋	脛	隅	銭	芹	底

鯛丈 太刀 竜 縦 蓼 谷 度 為 誰 父 乳 塵
 杖塚 次 槌 筒 綱 罽 罽 壺 妻 棲 罪 艶 面 釣
 弟子 塔 咎 時 床 何 処 友 苗 中 何 主 布 軒
 熨斗 後 灰 蠅 萩 刷 毛 蓮 縁 機 肌 鳩 體 晴
 稗 膝 菱 輝 姫 蟻 房 節 筆 鮒 舟 文 臍 紅
 蛇 篋 他 程 舞 幕 枅 胯 的 繭 眉 右 峰 蓑
 宮 棟 室 姪 物 粗 森 八 重 宿 樹 脂 藪 槍 故
 床 百 合 横 余 所 宵 嫁 腋 脇 梓 業 毘 罽 藁
 我

五 調査結果

調査の結果から、筑前では、二音節名詞の音調に次の三種類があることがわかった。

○●▽型 ●○▽型 ○●▼型

上二つが、筑前本来のアクセントである。三番目のものは、東京方言アクセントの影響を受けて、○●▽型から○●▼型になったと考えられる（後に述べる東京方言アクセントの、筑前方言アクセントに及ぼした影響を参照）。よって、この節では、○●▼型も、本来は、○●▽型として論じる。さて、今回の調査結果をまとめると、次のようになる。

A すべての話者が同じ型に発音する語

イ||○●▽型(尾高下型)

足 味 網 家 烏 賊 池 犬 芋 色 岩 歌 腕
 馬 裏 枝 襟 岡 沖 音 鬼 親 顔 崖 駕 風

蟹 金 壁 髪 川 皮 肝 草 櫛 口 倉 米 坂
 酒 鏑 皿 塩 鹿 島 尻 城 皺 壽 司 裾 砂 炭
 袖 滝 竹 棚 玉 樽 月 薦 土 角 爪 鉄 寺
 毒 年 虎 泥 波 繩 肉 庭 糠 蚤 墓 箱 恥
 旗 鼻 花 羽 浜 腹 人 暇 紐 蓋 緑 筆 骨
 堀 真 似 豆 水 店 溝 道 耳 胸 村 飯 山 闇
 指 弓 夢 綿

ロ||○●▽型(頭高型)

青 赤 秋 朝 汗 跡 兄 姉 雨 息 椅子 白
 瓜 影 笠 数 肩 下 駄 鯉 瘤 猿 支 那 汁 外
 側 蕎 麦 空 種 足 袋 鶴 鍋 生 葱 猫 喉 針
 春 鮒 船 前 孫 松 窓 味 噌 麦 夜

B 話者による型の相違は少しあるものの、十人中八人は同じ型に発音するもの(百分率で)

イ||○●▽型がほとんどの語

穴 飴 魚 嘘 膿 梅 垣 鍵 亀 殻 菊 北 国
 熊 鞍 栗 式 品 席 鷹 蛸 旅 夏 糊 幅 髭
 脇 服 町 毯 桃
 ロ||○●▽型がほとんどの語
 痣 栗 板 糸 稻 桶 帶 柿 紙 茅 絹 錐
 蜘蛛 桑 鞆 柴 白 粒 露 弦 茄子 虹 鑿 箸
 蛭 富 士 婿 鞭

C 話者による型の相違がBの語より大きいもの、いって

れば○●▽型・●○▽型のどちらの型に属するとも決めに
くいもの(上の数字が○●▽型に、下の数字が●○▽型に
発音する人の数)(数字の合計が23より多いものがあるのは、
二通りの発音をする人がいるためである。)

石 14/9 海老 15/8 蚊帳 13/12 雉子 17/6 傷 18/5
牙 12/11 雲 17/6 腰 15/8 琴 16/7 粉 14/9 鋤 17/6
杉 12/11 咳 18/5 蟬 12/11 梨 15/8 西 18/7 昼 15/18
藤 15/9 冬 18/5 星 17/9 虫 16/7 雪 16/7
麻 9/16 蟻 10/13 牛 6/17 貝 9/16 牡蠣 5/18 瘡 10/13
霧 6/17 靴 7/16 独楽 5/18 鈴 5/18 鳥 6/17 海苔 5/18
蜂 5/19 笛 9/15 股 5/18

各個人のアクセントが、具体的にどうなっているかを、ここ
に示したいが、紙数の関係で省く。

六 類別について

これらの語において、語群ごとにアクセントの型の対応の事
実があることは、諸家周知のごとくである。二音節名詞の場合
は、第一類から第五類までである。

奥村三雄氏案

一類||味 飴 蟻 烏賊 魚 牛 梅 枝 海老 岡 沖
顔 柿 駕 風 蟹 金 壁 蚊帳 雉子 傷 客 霧
口 国 腰 酒 皿 直 品 城 皺 鋤 杉 鈴 裾
砂 袖 鷹 滝 竹 棚 爪 敵 虎 鳥 西 庭 箱
蜂 鼻 羽 幅 髭 暇 紐 笛 藤 蓋 棒 星 水

溝 道 虫 桃

二類||石 岩 歌 音 垣 紙 川 北 鞍 旅 知 患 弦
寺 梨 夏 橋 旗 肱 人 昼 冬 町 胸 村 雪
よそ

三類||足 網 家 池 犬 色 腕 馬 臙 裏 襟 鬼
親 貝 鍵 髪 菊 草 葡 靴 雲 倉 栗 米 坂
塩 島 珠 数 炭 月 土 弟子 毒 年 波 繩 肉
糠 熱 蛋 恥 花 腹 骨 堀 幕 耳 山 指 綿
四類||麻 跡 粟 息 板 糸 稻 白 瓜 運 帶 恩
害 笠 数 千 肩 絹 錐 下 駄 粉 独 樂 鞞 柴
汁 外 側 空 台 種 粒 喉 鑿 倍 箸 針 船
松 味 噌 麦

五類||青 赤 秋 朝 汗 兄 雨 桶 牡 蠣 影 蜘蛛
鯉 猿 白 蕎 麦 足 袋 露 鶴 鍋 葱 春 蛭 鮎
前 窓 婿 夜

平山輝男氏の類別語彙表は、『日本語音調の研究』181頁以下
の音調比較対応表を参照されたい。
金田一春氏の類別語彙表は、『国語アクセントの史的研究』
62頁を参照されたい。

七 筑前二音節名詞音調についての考察

ここでは、奥村氏類別語彙表をもとに、五のA・B・Cに属す
る語彙を分析してみる。

Aイの語 一類||35語

Aロの語 一類||0語

二類 9 語
三類 39 語
四類 0 語
五類 0 語
未定 24 語

Bイの語

Bロの語

一類 10 語
二類 7 語
三類 3 語
四類 0 語
五類 0 語
未定 11 語

一類 1 語
二類 3 語
三類 0 語
四類 14 語
五類 5 語
未定 6 語

Cの語

一類 18 語
二類 5 語
三類 3 語
四類 3 語
五類 2 語
未定 6 語

右の分析をもとにして筑前アクセントの考察を行なう。
すべて同じ型に発音されるアイ・Aロの語彙をみると、AI
(○●▽型)には、一・二・三類ばかりしかなく、Aロ(●○
▽型)には、四・五類しかない。このことから、筑前の典型的
な二音節名詞音調の性質は次のようであると言えよう。

注²
一・二・三類 〇●▽型 四・五類 〇●○▽型 … (α)

さて、Bイは、一・二・三類ばかりで、(α)と一致する。
Bロは、四・五類の語彙は(α)と一致するが、一類の1語、
柿と、二類の3語、紙・弦・橋が(α)と一致しない。

このBロの4語と、Cの語の31語が、なぜ典型(α)から大
きくずれているかを次に考えたい。まず、音韻面から考える。
第二音節の母音が狭い語に傍線を引いてみると、

- 一類 海老 蚊帳 柿 雉子 傷 腰 鋤 杉 西 星
- 虫 蟻 牛 霧 鈴 鳥 蟻 笛 藤
- 二類 石 紙 弦 梨 橋 昼 冬 雪
- 三類 雲 貝 靴
- 四類 粉 麻 独 衆
- 五類 股 牡 蠣

(β)

右の表(β)から言えることは、一類と二類の語で、第二音
節に狭母音を持つものが、特に、典型(α)から離れやすい、
ということである。^{注3}ところが、(α)では、一・二・三類は同
じアクセントである。よって、筑前式音調は、その第二の特徴
として

へ一・二類 対 へ三類 (γ)

の対立があると言えようか。最も今は、筑前の被調査者二十三
人を全体としてとらえているのであって、各個人についてこの
(γ)の性質がどの程度言えるかは、後で論じる。ここでは、
(γ)の性質が絶対的なものではない、とだけ言っておく。

今度は(β)から傍線を引いた語(ただし・二類だけ)を除いた語について、なぜ、典型(a)からのずれが大きいかを考察する。

蚊帳||一類

○●▽型||13人 豊前・東京では○●▽型

●○▽型||12人

本来は○●▽型だったのが、なんらかの理由、例えばこの語がそれほど日常使われる語でない、とかのため、基本型(筑前では○●▽型)に変わった人もある、と考えられる。

笛||一類

○●▽型||9人 豊前・東京では○●▽型

●○▽型||15人

これも、日常使われないための基本型への移項と考えられる。

雲||三類

○●▽型||17人 豊前・東京では○●▽型

●○▽型||6人

同音異義語の「蜘蛛」(4類)は、○●▽||2人、●○▽型||21人。雲の○●▽型の6人は、東京方言からの影響か(二十代の三人がこの型)。

貝||三類

○●▽型||9人 豊前では○●▽型、東京●○▽型

●○▽型||16人

原因不明。

靴||三類

○●▽型||7人 豊前・東京では○●▽型

●○▽型||16人

原因不明。

粉||四類

○●▽型||14人(東京でも)

●○▽型||9人(豊前でも)

東京方言の影響とは考えられない。不明。

麻||四類

○●▽型||9人(東京でも) 豊前では○●▽型

●○▽型||16人 同音異義語「朝」は○●▽型

右の9人は、「朝」との区別をつけるために、●○▽型から○●▽型へと変えたのであろうか。

独楽||四類

○●▽型||5人

●○▽型||18人(豊前・東京でも)

右の5人は、「コマまし」などの連語からの類推からの発音ではないか(独楽は普断使われないため類推が起きると考えられる)

股^も

○●▽型||5人 東京では両型

●○▽型||18人(豊前でも)

「桃」は○●型||22人、●○▽型||1人。よって「桃」に引っぱられたか、同意語「ももど」に引っぱられたか。

牡蠣||五類

○●▽型 5人

○●▽型 18人 (東京・豊前でも)

同音語「柿」は全員○●▽型。よって、右の5人は、「柿」との区別をつけるためか、同意語「カキポー」からの類推と思われる。

さて、筑前の被調査者23人を全体として考えた時、(γ)即ちへ1・2類へ対へ3類への対立が、第2音節に狭母音を持つ語に表われていることが見られた。ここで、金田一氏と奥村氏の説をあげる。

金田一春彦氏(「対馬の自然と文化」83〜98頁)

85頁の表と注から

○●▽型	一・二類 (第2音節の母音が広い語)・三類
●○▽型	一・二類 (第2音節の母音が狭い語)・四・五類

奥村三雄氏(「対馬方言の性格」)

右の金田一氏の説を示されたあとに

この説によれば、福岡式は(一・二類/三類/四・五類)という対立を示す(中略)が、私の調査(被調査者は、西区百道の堤和男氏大正七年生など年配の福岡人数名)結果に関する限り、一・二類と三類との間に、積極的な区別は認められなかった。

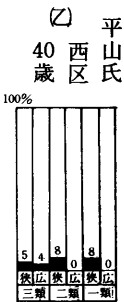
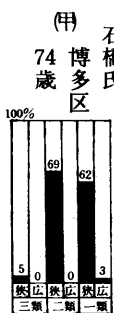
牛(一類)・紙(二類)の如きが●○▽型になる点は金田一氏説を裏付ける様であるが、しかし、貝・靴・海

苔などの三類語の○●▽型もある程度存する。また痣・桑・孫など第二拍広母音にも●○▽型がかなり認められるのである。現在の福岡アクセントに関する限り、一おうへ一・二・三類を通じて概ね○●▽型、少数の例外が●○▽型になる」と見るべきであろう。

即ち、一・二・三類 〇●▽型、四・五類 〇○▽型である。

以上の様に、両氏は、一・二・三類名詞アクセントについて異なった意見を述べておられる。しかし、今回の調査では、両氏の説が同時になりたち、また、それだけでは尽くせない事実が見られた。次に、一・二・三類について実際の例をあげると、

石橋氏



右のグラフは、一・二・三類語のうち○●▽型に発音される語の割合を、第二音節の母音の広狭によって分けて示したものである。(数字は%)

甲式は即ち金田一氏説の例、乙式は即ち奥村氏説の例である。23人のうち甲式に該当する人は5人、乙式に該当する人は4人いた。このように個人についてみると(γ)の性質を持たない人、つまり乙式の人もいるのである。甲乙両式以外の人はどうかと言うと、その中間にあると言える。

甲式・乙式の実態をよく知るためにそれぞれの話者について述べてみる。

甲式の人

青木重種氏

大正元年生 居住地はずつと現住所柏屋郡
柏屋町大字原町 公務員

石橋源一郎氏

明治三十二年生 居住地はずつと博多区古
門戸町 現役から引退 博多の長老的存在

中山瑞枝氏

昭和二年生 居住地博多区金屋小路
公務員 アクセント認識能力が発達

舟越京子氏

昭和十二年生 居住地はずつと東区大字松
崎 公務員

丸山ハセノ氏

大正七年生 居住地は二十三歳まで東区香
椎・以後同区箱崎 公務員

乙式の人

平山英子氏

昭和八年生 居住地はずつと西区田島
公務員

大野倫子氏

昭和二十六年生 居住地はずつと西区別府
学生 一部の語に共通語化が見られた

大社文治氏

明治二十九年生 居住地はずつと宗像郡津
屋崎町 農業 この地区では形容詞はイ語尾

力丸恭氏

大正十二年 居住地はずつと宗像郡宗像町
農業 アクセントの認識能力なし

普通、同じ地区に甲式と乙式程のアクセントの差があれば、それは年令による違いであるが、筑前では年令差としてではなく地域差として表われた。甲式、乙式及びそれぞれに近い型の表われかたを見ると、博多地区・柏屋地区では甲式が多く、そ

れをはさむようにして、旧福岡地区・宗像地区には乙式が多い。奥村氏が例としてあげられた西区百道は、旧福岡地区即ち乙式の地区である。

なお、第二音節の母音の広狭によるアクセントの違いは、一・二類だけに表われるものではなく三類にも共通なものである、との説もあるが、この考え方によると、筑前方言音調は、豊前式から一旦乙式に変化しそのあと左表の如くなったものと推測できる。

一・二・三類	四・五類
○●▽型	●○▽型
第二音節母音の狭	
い語のあるもの●○▽	

しかし私の御語の調査では、そのような結果は表われなかったし、金田一氏の「国語アクセントの史的研究」からの語彙11語の調査結果にも表われなかった。

さて甲式と乙式とはどういう関係にあるのだろうか。まず甲式から乙式へ変化していると考えうるか。一・二類で●○▽型のもので○●▽型に変化すれば、甲式は乙式になるのだが、もしこの変化が起こるとすれば、四・五類の●○▽型の語まで○●▽型となる。よって甲式↓乙式の変化は考えられない。次に乙式から甲式へ変化していると考えられるか。乙式には既に一・二類対三類の別がないから、三類はそのまま一・二類の第一音節に狭母音を有する語だけが●○▽型になるとは考えられない。よって乙式↓甲式の変化も起こらない。以上から、甲式・乙式は兄弟関係にあると考えられる。

若い世代に、共通語アクセントの影響がかなり見られた。筑前式アクセントには、一・二・三類の間に区別が無いが、共通語アクセントには一類対二・三類の区別があるため、若い人に混乱が見られるようになってきている。二・三類名詞は同じ○●▽型であるが、一類は共通語では○●▽型、筑前式では○●▽型であるため、筑前の若い人は、一類語はもとより、二・三類語まで○●▽型に発音する「誤れる回帰」をおこしている。しかし、これはまだラングとしての定着はおこしていずパロールのな段階にある。

最後に、被調査者の移転歴は、言語形成期をはずれていたためか、全く問題にならなかった。

注1 この類別については国語学辞典94頁を参照。

注2 この一・二・三類対四・五類の対立を持つ所は、ほかに山梨県奈良田、

石川県大聖寺(この二箇所は学習院大学・国語国文学會誌・第6号・徳川宗

賢氏・日本諸方言アクセントの系譜(試論による)、それに越前今庄にある。

注3 三類の貝、靴は第二音節に狭母音を有するが、この二語は、割合からいけば無視できる。

注4 豊前式アクセントは、遠賀郡芦屋(筑前式アクセントとの境界に近い)

での調査結果による。東京式アクセントは三省堂の金田一春彦編明解アクセント辞典、平山輝男氏編全国アクセント辞典によった。

注5 若い世代とは、二十歳代の人であって、三十代の人には影響はそれ程度者ではない。また奥村三雄氏に提出されたレポート(福岡教育大三年女性Y・A氏)によると田川郡出身の大学生の間にも誤れる回帰が見られるという。

受贈雑誌②

- ／野州国文学(国学院大学栃木短大) 12 13 / 鶴見大学紀要 11 / 国文鶴見 9 / 高崎経済大学論集 16 卷 3 4 / 相模女子大学紀要 37 / 相模国文 1 / 文献ジャーナル(富士短大) 12 卷 12 / 13 卷 5 / 国立国語研究所論集(こぼの研究) 4 / 金沢文庫研究 19 卷 9 / 20 卷 5 / 国文学論集山梨大 11 12 / 国文学研究資料館報 2 / 静岡女子大学国文研究 7 / 研究紀要(静岡女子大) 7 / 人文論集(静岡大) 24 / 名古屋大学国語国文学 34 / 名古屋大学文学部研究論集 21 / 愛知県立大学文学部論集 24 / 説林(愛知県立大) 22 / 国語国文学報(愛知教育大) 26 / 東海学園国語国文 6 / 岐阜大学国語国文学 10 / 岐阜大学研究報告 22 / 皇学館論叢 6 卷 4 / 7 卷 1 / 女子大国文(京都女子大) 71 72 / 国文学(関西大) 50 / 人文論究(関西学院大) 23 卷 2 / 4 / 龍谷大学論集 403 / 文芸論叢(大谷大) 2 / 大阪松蔭女子大学論集 11 / 樟蔭国文学 11 / 文林(樟蔭女学院大) 8 / 大阪市立大学文学部紀要 人文研究 25 卷 7 分冊 / 国語国文(京都在) 42 卷 12 / 43 卷 4 / 青踏女子短期大学紀要 2 / 同志社国文学 9 / 人文科学(同志社大) 2 卷 2 / 待兼山論叢(大阪大) 7 / 女子大文学国文篇(大阪女子大) 25 / 山辺道(天理大) 18 / 梅花女子大学文学部紀要 10 / 植生野国文学(四天王寺女子大) 4 / 武庫川国文 6 / 大阪府立大学紀要 21 / 平安博物館紀要 5 / 親和国文 8 / 国文学研究ノート(神戸大) 3 / 神戸外大論叢 24 卷 1 / 6 / 金沢大学教育学部紀要 22 / 金沢大学教養部論集 11 / 岡大国文論稿 2 / 島大国文 3 / 方言研究年報(広島大) 16 / 田唄研究(広島大) 15